

「Scene 北海道」
北の魅力発信人

フォトグラフィアーシーン

特別編

今回は特別企画といたしまして、弊誌を監修いただいておりますプロフォトグラファー岸本日出雄氏にプロの写真家になるまでの歩みについて寄稿いただきました。



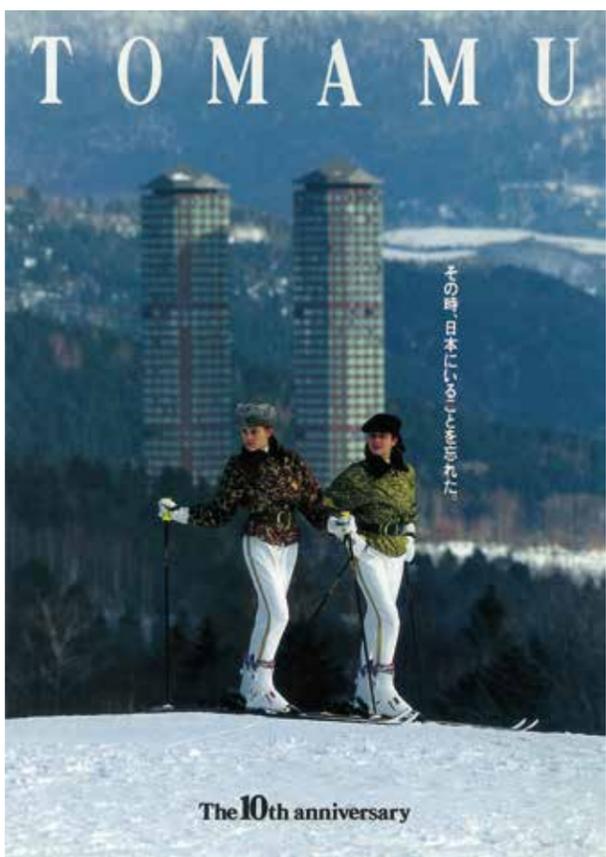
札幌 コマーシャルフォト 岸本 日出雄 (札幌市)

「15歳、一枚の入賞作品が私を写真の虜に」

最近、プロの写真家になるには？といった質問が数多く寄せられることなので、私の場合に限っての話になりますが、少し書かせてもらうことにしました。さまざまな方法があり、プロへの道筋は人によって異なると思いますが。

私の写真との最初の出会いは高校時代です。高校入学後、同級生に誘われるまま写真部に入室しました。先輩のカメラを借りて動物写真に挑戦しました。すると幸いにも、すぐに写真コンテストに入選。それまで賞状の類とは無縁だった私は、即、写真の虜になりました。写真を通して自己表現できること知り、意識がガラリと変わったのは確かです。写真部室に入り浸りで、身近な被写体を片っ端から撮っていました。3年生の時、今も大御所として広告写真界に君臨する篠山紀信さんと、立木義浩さんが撮った女性写真を見て、驚愕したのを、はつきり覚えております。日本の広告写真にアトが取り入れられ始めた斬新な時代の到来でした。

ただし、まだこの頃の私は、はつきりとプロを目指していたわけではありませんでした。大学入学後も早速写真部に入りましたが、当初は体育会系の若者が体を鍛える様や、オホーツクで働く人々の姿をドキュメンタリータッチで撮ることに邁進し、少し自慢させて頂けるなら、コンテスト荒らしとして、仲間うちでは知られるようになっていました。そうこうするうちに、写真を職業としたいと願うようになっていきます。写真の専門学



校へ行ったわけではないので、プロになるにはコマースタルスタジオに就職することが必要だと考え実行に移した次第です。

コマースタル専門のスタジオ時代、大手広告代理店の写真部出向時代を通して、写真技術の基礎を徹底的に叩き込まれました。デジタル全盛の現代に比べ、カメラ自体の性能はかなり劣っていましたから、写真の出来不出来にはカメラマンの技量が大きく関与しました。今では、逆にそんな時代であったことに感謝しています。

その後独立し、現在のスタジオを立ち上げ、専らコマースタル写真、中でも女性写真を得意としてやってきました。これも、その頃の社会情勢のおかげかと思いますが、ポスターやカレンダーがらみの海外ロケも多数経験できました。

その頃、ロケ先で偶然前田真三さんの作品を見て刺激され、風景写真にも心惹かれてはいましたが、なかなか実際に自分も取り組む気にはなれませんでした。風景に対峙するエネルギーを持ち合わせてなかった



というのが正直なところでしょうか。ところが10年前、モデル撮影で出かけた道東で出会った夜明けの情景に遭遇し、突然やる気スイッチが入ったのです。自然や野生動物は、こちらの都合など聞き入れてはくれません。地元の人や自由に時間の取れる人に嫉妬しながら、頑張つて現在に至っています。広告写真家あがりであることは決して無駄ではなかったといえるネイチャーフォトを目指しています。例え同じ場所、同じ時間、同じ被写体に遭遇していたとしても、またシャッターチャンスが一律であったとしても、写す者の想いが反映されると信じて撮り続けています。人の脳内の視覚領域への

刺激だけに留まらない、人の想像力を喚起できる写真を目指しています。相田みつをさんの「いちずに一本道、いちずに一ツ事」を座右の銘として、愚直に努力していきたいと思っております。

おかげさまで最近写真教室と呼ばれる機会も増えました。交流の中から思いがけない刺激を受け、嬉しい限りです。これからも初心を忘れることなく、多くの方々に写真を通して、北海道の魅力を発信できるよう、邁進する所存です。



風景デビュー作品「黎明の洞爺湖」



2013年 ヘリコプター機上にて